

參上捕之、

〔夫木和歌抄二十〕寂然が本へつかはしける十五首西行上人

山ふかみけぢかき鳥の音はせで物おそろしきふくろふのこゑ

〔大館常興日記〕天文十年正月九日、一以佐内々被尋下候、今度小林江州より罷上候時、六角左京大夫方より、白キふくろうを進上候、仍可被成御内書也、但如何候哉之由被仰下也、此御儀御内書被成候に不及存候、申次方たれにても以書狀御自愛被思食候趣、被仰出候通、よく／＼申させられて、可然奉存候間、言上之仕也、

〔假名世説〕支唐禪師は、源子和が父の方外の友なり、諸國行脚の時、出羽國より同宗の寺あるかたへゆきて、其寺にしばし滯留ありしに、庭前に椎の木の大なるが朽ちて、半よりをれ残りたり、一日住持此木を人して掘りとらせけるに、朽ちたるうつろの中より、雌雄の梟二羽出で、飛びさりぬ、其跡をひらきみるに、ふくろふの形を土をもて作りたるが三つ有り、其中にひとつはやくも毛少し生ひて、啄足ともにそなはり、すこし生氣もあるやうなり、三つともに大さは親鳥程なり、住持ことに怪しみけるに、禪師の云く、これは聞き及びたる事なりしが、まのあたり見るはいとめづらし、古歌に、ふくろふのあた、めつちに毛がはへて昔のなさけいまのあだなり、と此事をいひけるものなるべし、梟はみな土をつくねて子とするものなりと、住持も禪師の博物を感せり、

〔嬉遊笑覽禽十二〕童の諺に、梟は夜が明ば栖を作らうと啼といへり、ほうしくろうと鳴といへるにちかし、されどしか啼といふは他の鳥なり、本満寺日重が和語雜々抄に、はかなしや雪のみ山の鳥だにも世にふることはおもはぬものを、寒苦責我夜明造栖、これは雌鳥が鳴聲なり、今日不知死、明日不知死、何故造作栖、安穩無常身、雄の鳴聲なり、世にふることをおもはぬよしなり、按、本草